

北海道札幌大學内

八

田

三

郎

様

膝下



藏

十一月廿五日



大坂市西區南堀江通壹丁目
勝本鼎一

けやかや申上げねばふらん事があったので
 下が退：うも汐浜路しやした。お汐し下こい
 其ぬりこといもを丸る——。

父は廿三日の朝七時下出るの列車で宮島向
 ち発しました。今た宮島に——海。唯今汐浜の
 便りにより下白下りの一泊ををたやました。
 下の思い或今社を浦へ其れより別府に到りぬ
 二三日浪花遅くも月末には帰る。

これより先廿一日の午後の日杜野電流
 父は在存をす一人かやりました。ふもふく島
 其父を来訪。父お去の故を以て命令をさけら
 るお去しやした。お例のゆり今人しやした。

野良「大のりには土掘田に取付の大のり伏屋

取付」の「法を以て先生が曉を尋ひ書きたる。

懐い「或は指しは或事件を掌取し居れり」と

又「暁露」^んかゝるべし。我れ昔之れを知らずか

如に辨えし「或は」と答ふし、更に先生を中

心とし「此れは法言書法を信じ置した。先生

唯此辨疏を讀み置すや。や、あつて先生を曰

く「實は此子から父さんになんかや」しか

法したと思ふやなういすか——いふいふ

せうか指し指しやうすくひす。今日も先生が書

かすといふれやういふ書いふや。全くおろしと

しすといふ。此は陰陽府に事柄を治すの由而白

りまふ。我ははらとむ思てや、ふいづこすか

をいふとを此の余計ふ事になれ、れをいふ

もあふふふふふ。かかかかかかかかかか

りてをのふふふふ。ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ。ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ。ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ。ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ。ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ。ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ。ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ。ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ。ふふふふふふふふふ

の不命令を悔いたのは痛坊じしと。空を甲せ
 ばへキゴトと申す如字部長史の初めと命を
 びすか、どいも氣に念はふさうふ、いす
 情を減らしたりせんじや。

其の日に改行儀および著し文に曰く宣教

与初に。夫、この世に世々の即然の心鳥居

ゆいに計りおこみ、社に是をを祈ねるを

し、この心を結ばしと。此の初なるは法はの海くか

く根木此人の而上又浪氣の透れを久しと

小を此のあゆふの神廟を久しと。神廟

そートんの言ふをしくうふを立えんの輪転石は

今やこれし大の成に世の是りを祈かしむべし

とていふ

の聲

つゝわゝかあゝいせじ。あをほりぬにしこむ
別途を祈る心切なり。漢くで及志を盡し

今朝は船窓を改めて去れ寂意と悔意を盡し

と書きしむ。あかひのぬに——と紙をつり

いかにのび詩を書いて書きしむ。「若念」に

題しむ。若し内題はKとしこむと所たうを

あかすのうゝとていふ

今柳法中上女い事かましくせんあうまう。お

の字題に里しこむ。あうまういぬこむ。しか

し亦は他を物しむせう。大々たる中世は

逆又許法を物しむせう。大々たる中世は

あかすのうゝとていふ。許法の傍飯はうとていふ

せん。唯今又此等書格等、代へ可討方流所
 しました。行ふに手紙を櫻井²⁷の懇意は足
 せり。おのれに思ひ多す。悦へを審判の日に得る
 事也。竹及び辯迷書同討し之思ひました。
 字しせとりせん。其の必^必ありまじ
 まい。おのれに悦ひ送るとかから又之は送る
 分ふ事也。一層物の此を返し下れは増か
 ること申す。おのれに悦ひ。い、い、い、
 へり。おのれに悦ひ。送る。おのれに悦ひ。
 二やうました。新刊世にする。うむす。

今朝未だ、おのれに悦ひ。送る。おのれに悦ひ。
 ち。おのれに悦ひ。送る。おのれに悦ひ。
 ち。おのれに悦ひ。送る。おのれに悦ひ。

「おれが中上だぞ。」

今のほろくさん、おれをかくつては、おれが王に
乱筆とあつた。あつかうが。おれは、おれは、おれは、

い。おれは、おれは、おれは、おれは、おれは、おれは、

不才

十一月十日

おれ

八月十日

おれ

申さずして、おれは、おれは、おれは、おれは、おれは、おれは、